

12. 生後1年間に於ける乳幼児の被服に関する研究

(第1報) — 関東地区に於ける実態 —

東京家政学院短大 岡野 和子

1. 生後1年間に乳幼児の被服は、どんな品種が使われ、その材料は何が用いられているか、製作は自家製か既製であるか等について実態を調査検討し、合理的な乳幼児のための衣生活はどのようにあるべきかを考察し、衣生活改善の基礎となし、また家庭科被服のカリキュラム編成の資料とするものである。

2. 今回はそのうち、関東地区をとりあげ、昭和29年1月より、34年12月迄の5年間に出生した乳幼児を持つ337世帯を対象とした。調査方法は質問紙法により、回答は多項選択の形式による。その結果を、1. 被服の品種及び点数、2. 被服材料の繊維及び織物別、3. 自家製品か既製品か、4. 仕立方別（上着についてのみ）の項目に分けて集計を試みた。

3. (1)品種は37種目に及び、1軒平均は112点であり各品種については夫々平均点数を求めた。(2)被服材料を繊維別に分けると木綿が $\frac{2}{3}$ 以上を占め、ついで羊毛、化繊の順となる。また各品種毎に織物別の比率が得られた。(3)関東地区全体では自家製品47.3%、既製品52.7%であり、東京都内は、都下及び関東各県に比し既製品の利用度が高い、(4)上着の仕立方としては単76.7%、袷12.6%、綿入10.7%の割合であるが、東京都内は単が多く、袷、綿入の少いのが特徴である。以上各項目について一般的傾向をつかむことが出来たので、その結果を報告する。